

平成28年8月11日(木)

老球の細道257

ゲームマネジメントあれこれ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

夏休み真っ盛り。多くのチームがファンダメンタルの練習と練習試合に余念のないことだろう。特に練習試合については、まだチームができあがらないうちになんとなくゲームをこなしていても実力はついていかない。しっかりとゲームの目標、ゲームプランを立てながら練習試合を有意義にこなして欲しい。

選手がゲームで実力をつけていくのと同じように、コーチもゲームを通してゲームマネジメント、ベンチワークなどのコーチングスキルを学ぶチャンスである。大切なゲームはほとんど一桁差で勝敗が決する。接戦での勝利、敗退はコーチの手腕によるところが大きい。なのにコーチはそのゲームをモノにするためにどれだけの準備をしてゲームに臨んでいるだろうか。

最近多くの大会を観戦していると、メンバーチェンジもしないで決まったプレイヤーだけでゲームをこなすチーム。大事な場面でタイムアウトもとれない、タイムアウトを取っても適切な指示ができない。ただコートサイドに立ってシュートが入れば選手と一緒になっってはしゃぐだけ。まさに選手の自主性にまかせる教育的なコーチがいかに多いことか。

かつて原町高校のコーチ時代、それまで県大会1回戦負けのチームが県選抜大会(当時はNHK杯)で準決勝まで進んだ。ゲーム終了6秒前まで1点差でリードしていた。私の頭の中に「決勝!優勝!」がちらついた。マイボールでバックコートからのスローイン。定石通りにタイムアウトを取ったが「ミスをしなくてボールを運べ!」くらいの指示しかできなかった。案の定、相手のディフェンスのトラップに引っかかりインターセプトからランニングシュートで逆転負けを喫した。あの経験は今でも夢にあらわれる。なぜもっと落ち着いて具体的な指示ができなかったのか、今でも悔やまれるゲームであった。

また、会津高校のコーチ時代は、前半に20点以上の差をリードしながら、後半相手のディフェンスの変化に対応できず自滅し逆転負けを喫する屈辱を2回も経験した。これもディフェンスの変化でパニックになった選手に適確な指示を与えることができず、ミスをする選手をなじるだけの最低のベンチワークしかできなかった私の未熟さが敗因だった。

またその真逆の経験もある。坂下高校時代の県高校体育大会会津予選である。1回戦からなんとか勝ちあがって決勝まで進んできたが決勝の相手は当時最強を誇っていた会津高校。前半20点差以上もつけられ、やはりダメかとほぼあきらめていたが、後半相手は突然ゾーンディフェンスに変えてきた。そしたら途端にわがチームは外からのシュートが決まりだし、徐々に点差をつめ、ゲーム終了間際10秒で逆転のフリースローを決めて2点リード。最後は相手の3Pシュートを鬼のような形相で守り通し奇跡の番狂わせを起こしてしまった。相手の作戦変更によって偶然に得た棚からばた餅である。

このようにコーチのゲームマネジメント、ベンチワークによって勝敗に影響を与えることは結構ある。バスケットボールはサッカーやラグビーとは異なり「コーチナビリティ」の強いスポーツである。良い選手がそろえば「頑張れ!」だけですむかもしれないが、いつもそうはうまくいかない。だからコーチは選手の日頃の努力を無駄にさせないために、ゲーム前、ゲーム中、ゲーム後のマネジメントに最善を尽くさなければならない。